



19世紀の反抗的作家

人文科学系・言語文化学領域

■研究キーワード 19世紀のフランス文学、ジュール・ヴァレース

■主な所属学会 日本フランス語フランス文学会

■研究者総覧

<https://koto10.nara-wu.ac.jp/profile/ja.268a94a565dbbc85520e17560c007669.html>

トノムラ イザベル

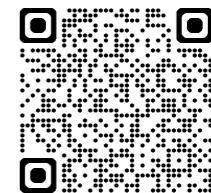
教授

Tonomura Isabelle

博士(文学)



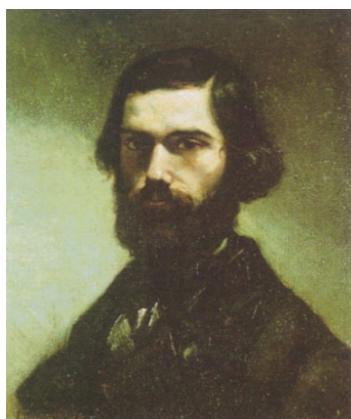
Nara Women's University



研究者総覧

研究概要

私は19世紀フランスの作家ジュール・ヴァレースに関心を寄せている。彼には小説家としては、幼少期に自分が受けた虐待によって、反抗と政治的関与へと導いた過程を描いた三部作「L'Enfant」「Le Bachelier」「L'Insurgé」がある。ヴィクトル・ユーゴー やエクトール・マロが不幸な子どもを悲劇的に描くのとは異なり、ヴァレースは、彼自身が被害者であった教育原理の不条理を告発するために、あえて客観的にユーモアを用いた表現をした。さらに彼は、第二帝政末期やパリ・コミューンといった政治的混乱の時代において、優れたジャーナリストであり、新聞事業家でもあった。とりわけコミューン期に創刊した代表的な新聞「Le Cri du Peuple」は、彼の象徴的なものである。またヴァレースは、生涯を通じて確固たる共和国主義者であり、そのため成人期の大半をナポレオン三世体制下で政治的反対者として生きることになった。



アピールポイント

私のヴァレース研究には二つの主要な軸がある。

1)空間への感受性とアイデンティティの探求。

ヴァレースは、空間に対して特異な感受性を示し、自己のアイデンティティを探るために空間を遍歴しているように見える。彼の三部作におけるさまざまな空間（農村景観、都市景観、庭園など）。特に拘束される場、あるいはそのように知覚される空間に重点を置く。すなわち、彼自身の出自とは異なるブルジョワ教育を受けた寄宿学校、政治的な立場を理由に収監された監獄、そして父親の命により共和主義的思想のゆえに入れられた精神病院である（19世紀においては政治的意義申立てが逸脱行為と見なされることがあった）。

2)ジャーナリスト活動と検閲回避の編集戦略。

ジャーナリストとしての活動において、特に1867年、パリ万国博覧会の年に創刊された彼の最初の新聞「La Rue」に注目している。ヴァレースが、万国博覧会という華やかな「イベント」の背後に隠された同時代社会の実態を検閲を回避しつついに伝えようとしたのか、その編集戦略を分析している。

「フランス文学」の授業においては、ヴァレースの三部作と一緒に読み進めつつ、文学における「子ども」という人物像、教育原理および教育観の変遷、そして厳格な教育が人格形成に及ぼす影響といった主題について考察をしている。

「上級フランス語」の授業においては、本年度、ヴァレースが「ラ・リュ」紙に寄稿した1867年パリ万国博覧会に関する記事を読み進め、2025年大阪万国博覧会との類似点および相違点を比較したいと思う。